学校教育実践学研究，2018，第 24 巻，149 － 156 頁

授業の力量形成に関するライフヒストリー研究（その 3）
― B 氏の体育授業を中心に―

木原　成一郎・小田　啓史*・大後戸　一樹

（2017 年 12 月 21 日受理）

A Study of Life History on the Professional Development of Teaching:
Focusing on Teaching in Physical Education of A Junior High School Teacher B

Seiichiro KIHARA, Hirofumi ODA and Kazuki OSEDO

Abstract.　This study aims to clarify what factors made and transformed ‘teaching style’ in physical education of Junior High School Teacher B through interpreting a life history of Teacher B. The results are summarized as following points. 1. The ‘teaching style’ of Teacher B on physical education in the I period (1989.4-1997.3) was made by factors of ‘belief as a teacher’ and ‘reflection on his teaching based on chances of professional development and resources left by predecessor and books’. 2. The ‘teaching style’ of Teacher B in the Ⅲ period (2005.4-2017.3) was transformed by factors of ‘meeting with Mr. E and Mr. F belonging to C Attached Junior High School Q’ and ‘learning of the theory of physical education’.

Key words : professional development，physical education，life history, teaching style

1　はじめに
1-1　体育授業の力量形成と「授業スタイル」

本研究は，木原ら（2016,2017）の続報である。そのため，問題の所在は研究の目的の説明に必要な概要のみ再度述べる。本研究では，「専門的な知識や技術」に加え「構えや態度」を含む包括的な「授業の力量」(藤原顕,2007)を把握するために，「教師の教育観，授業観，子ども観といった観の世界と技術も含む具体的な方法論が一体となったもの」(森脇,2007)と定義された「授業スタイル」に着目した。

1-2　教師のライフヒストリー研究

本研究は，教師の授業やカリキュラムに焦点を当て，「授業スタイル」を形成し変容させた要因を明らかにしようとする。そのために，「教室・学校における実践歴や，地域・社会における生活歴を含むその個人史の全体」であり，「授業実践経験の歴史そのもの以上の内容を含む」(藤原顕ほか，2006,p.16.)ことを記述する方法であるライフヒストリーに注目した。なぜならば，授業やカリキュラムに焦点を当て，「授業スタイル」を形成し変容させた要因を教師のライフヒストリーを通して明らかにすれば，その教師の授業力量の成長過程が明らかになると考えられたからである。

2　研究の目的

本研究の目的は，B 氏の体育授業に関するライフヒストリーを対象にして，B 氏の体育の「授業スタイル」を形成し変容させた要因を明らかにすることである。

3　研究の方法
3-1 対象の説明

表 1 のように，対象とする B 氏は，1966 年に出生，1989 年 3 月に L 大学教員養成学部を卒業後，同年 4 月に 22 歳で C 市立 O 中学校に保健体育教諭として採用された。B 氏は，1997 年 4 月に C 市立 P 中学校に転任，その後，2003 年 4 月から 2017 年 3 月まで C 大学附属 Q 中学校に教諭及び主幹として勤務した。B 氏は，2017 年 4 月に C 市立 R 中学校教頭となり授業担当を外れるまでの

* 広島市立中広中学校

28 年間保健体育科の授業を担当した。また，50 歳で C 市立 R 中学校に転出するまでの 14 年間 C 大学附属 Q 中学校に勤務した。

表 1：B 氏の学歴及び職歴

年 月 日	学 歴 及 び 職 歴
1966年10月	C県で生まれる
1985年3月	C県立K高等学校　卒業
1985年4月	L大学教育学部中学校教員養成課程　入学
1989年3月	L大学教育学部中学校教員養成課程　卒業
1989年4月	C市立O中学校教諭
1997年4月	C市立P中学校教諭
2003年4月	C大学附属Q中学校教諭
2010年4月	C大学附属Q中学校主幹
2017年3月	C大学附属Q中学校退職
2017年4月	C市立R中学校教頭（現在に至る）

3-2　資料の収集

3-2-1　実践記録の収集

B 氏がこれまでに書いた体育授業に関する授業研究についての主な文献 17 編を収集した。そして，授業研究文献の発行年，Q 附属中時代の教師の同僚関係，大学との共同研究体制を加筆した年表を作成した。

3-2-2　インタビューの実施

インタビューは表 2 のように，2 回実施した。そこでは，作成した年表をもとに次の表 2 にある「内容」に関して B 氏が語った。インタビューは，「半構造化面接法」（鈴木淳子，2002,pp.24-25.）の形式で行った。そして，インタビューについて，すべて発話を文字にしたトランスクリプトを作成した。

表 2　インタビューの概要

	期日	参加者	内容
1回	2016.1.5	B 氏，調査者，共同研究者 X	教職参入前の教職をめざした契機やエピソード，教職参入後の成長の契機やエピソード
2回	2016.3.21	B 氏，調査者，共同研究者 X	「授業スタイル」の形成と変容に関する解釈

3-3　分析の方法

3-3-1　「KJ 法」による帰納的分析

調査者が，第 1 次インタビューのトランスクリプトを，文脈が切れないように意味内容のまとまった単位で区切り，23 個の発話を得た。その 23 個を「KJ 法」（川喜田,1967)を参照し，意味内容の似通った発話同士をまとめ，その意味内容を代表する「名札」を命名し小カテゴリーとした。続いて小カテゴリー同士で意味内容の似通っているものがあればそれらを集めて，同じ手続きで中カテゴリーを作成し「名札」を命名した。この手続きを，もう同じ意味内容をまとめられなくなるまで続け，もっとも上位のカテゴリーを大カテゴリーとした。

「内的妥当性」を高めるために，2016 年 3 月 21 日，表 2 のように B 氏に第 2 次インタビューを行い，この各カテゴリーの分類と命名及び図示の結果について，協議し「メンバーチェック」（メリアム,2004,p.298.）を行った。また，同日に共同研究者の X 氏とこの結果について協議し「仲間同士での検証」(メリアム,2004,p.298.) を行った。双方とも両者が結果に納得するまで協議を続けた。

3-3-2　実践記録の解釈

2016 年 3 月 21 日，表 2 のように B 氏に第 2 次インタビューを行い，B 氏の実践記録を資料とした「授業スタイル」の形成と変容の調査者の解釈について意見を交換し，これらに関する解釈を共同で記述し作成した。

図 1 において，「KJ 法」による帰納的分析と「内的妥当性」の確保，実践記録の解釈という分析の方法について，それらの構造を記した。

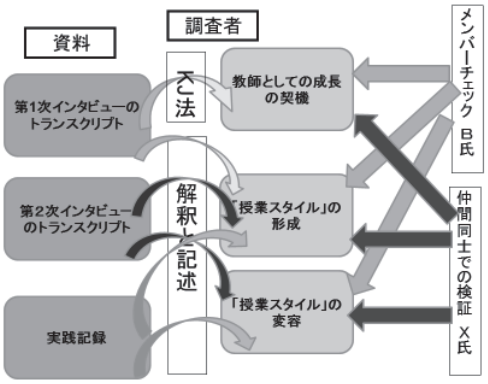

図 1　分析の方法

4　結果

第 1 次インタビューで作成された大カテゴリー及び中カテゴリー同士の関係を考え，その関係を図 2 のように示した。図 2 にあるように，B 氏の「授業スタイル」は，初任としての赴任校である O 中学校時代に形成され，附属 Q 中学校で変容したと解釈された。これから，4 つの大カテゴリーごとに，その内容を B 氏のインタビューの発話と B 氏の実践記録の解釈によって説明する。以下の

「　」でくくられた言葉はB氏の発話であり，その中の＜＞でくくられた発話はインタビュアーの発話である。

4-1 中等学校の保健体育教師への志望の形成と教員養成における準備【1979.4-1989.3】

B氏は，自分が教員になりたいと思った最初の契機を，中学生のときの恩師の影響にあると語った。B氏は，次のように，学級担任，運動部活動，生徒会活動の面からその影響を語った。

「えーと，ちょうど，具体的にはあの何歳ぐらいの先生か覚えてないんですけれども，野球部の顧問の先生で…＜中学校？＞中学校の。ほんと素人の先生で，C 大の昔水産学部？生物生産学部？を出られて理科の先生になられた先生が，素人ながら，ノックもすごい下手だったんですけど，でもよく休みには練習試合を組んで下さって，一年生の時の担任の先生でもあったんです。一年B組。＜金八先生ですね＞で，その先生がとても学級通信だったり書いて，知らせたり。学級の中でスピーチをしてそれを文章に起こして親にも発信してくれたり。それから，学級で合唱するとか，学級経営がとても，今だから教員の言葉で言いますけど，クラスをこう，とっても安心して暮らせるような，いいクラスに。」（第１次インタビュー）

中学校１年生の時の担任の理科の先生は，運動についての素人でも一緒に運動部の練習に参加し，「とっても安心して暮らせるような，いいクラス」をつくるというように，生徒を理解し寄り添う先生であったという。2 年生になると，担任の数学の先生の後押しで生徒会長になり，生徒会を指導していた１年生時の担任であった理科の先生に支援を受け，文化祭や新しい運動競技大会を開催する自治的活動をリードする体験をすることになったという。

「そうしよったら野球部の中から積極的な子がいて，六つか七つくらいの生徒会のポストに野球部から六人出て，僕が生徒会長になってしまって。一番票が入ってしまってですね。（中略）でその生徒会の顧問も若いその数学の先生が野球でも絡んでくれて授業でも絡んでくれて。で，その時，生徒会のバックには，生徒指導のバックにおったんですかね，一年生の時の担任の先生が，野球の。でいろいろ文化祭とか，今までやったこともない水泳大会をやりたいって言ったら水泳大会をやらせてくれたり。『駅伝大会やってみようやぁ。』って言って『学校周辺をコース作ってから，校内駅伝大会やろうやぁ』って。『マラソン大会もあるやないか』っていいながら『駅伝大会も面白いね』とかいってやって。ぼくらの時に…」（第１次インタビュー）

３年生は年配の英語の先生の担任で，やはり「あったかいクラス」をつくられた結果，卒業時にみんなが感動で泣いていたという。

「すごいあったかいクラスで，みんなすっごい掃除するんですよ。＜おおー。なんだか，その当時にそんな学校ないはずなんだけどねぇ。＞いやそれがですね，みんな男の子も泣きながら卒業するような，感じだったんですよ。ぼくも，泣いたのを覚えてるんですけど。」（第１次インタビュー）

生徒が安心できる学級を運営する学級担任，生徒と一緒に活動する運動部活動顧問，生徒の自治的活動を後押しする生徒会顧問という教師像がB氏に形成されていたと解釈できる。

C県立K高等学校では野球部で活動し，参観日の保健体育の授業で誰もできない鉄棒の蹴上がりが自分だけできたことを契機に保健体育に自信をもち，中高の保健体育専科教員の道を志すことになった。そして，L 大学教育学部中学校教員養成課程に進学し，体育会硬式野球部で活動し３年目には主将を務めた。こうして運動部活動に集中した７年間を過ごし，保健体育教師の専門的な力量について考えた記憶はないという。ただし，中学校の教員として描いていたイメージの影響と部活動指導との関係を問うたところ，B氏は新任教員として赴任したときの意識について以下のように述べた。

「でも，僕は逆に部活は１番最後やって。『学級で先生が班長会するけん残りんさい』ってなったら，『行ってこい』と。『委員会がありますから』と，『あぁ，行ってこい』と。もっとそんなんやった方がいいよって。『やれやれ』って言って。部活が１番最後でっていうふうにやってたので，あの，やっぱり，部活が凄く大事って，どう言ったら・・・勝つ事を目指してやるよりは，子どもがこういろんな場の中で，えーと，

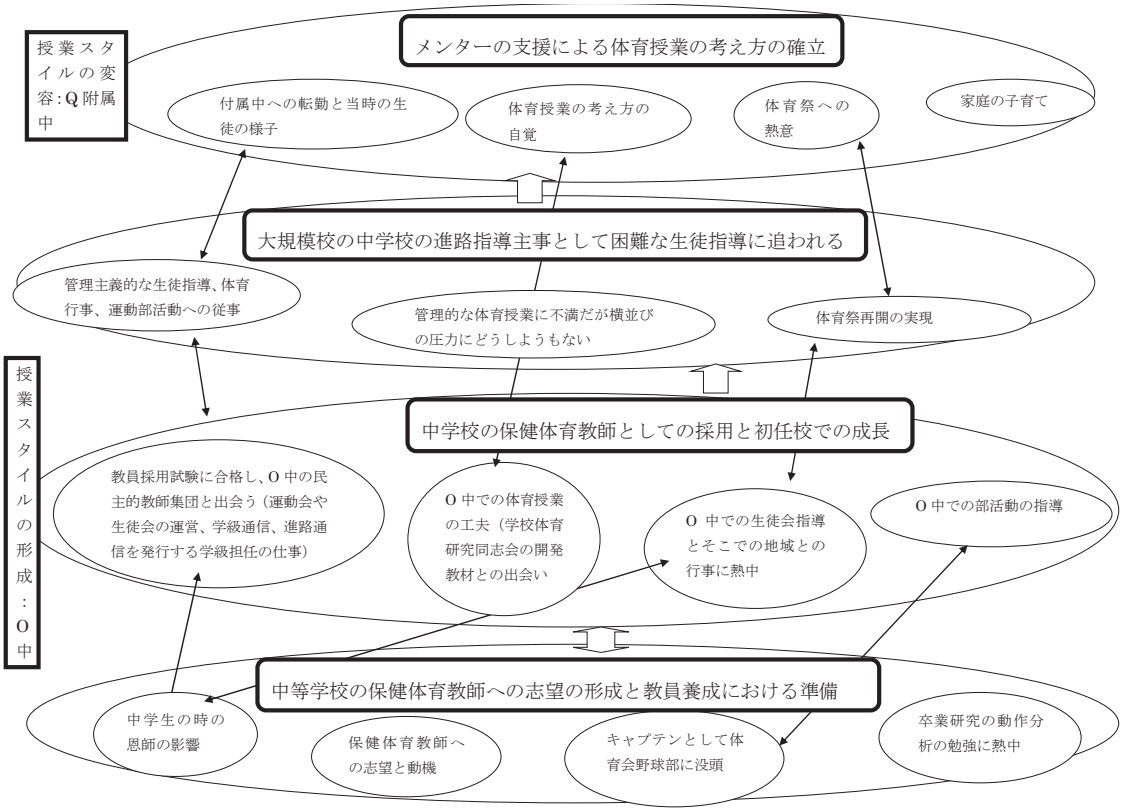

図 2　B 氏の教師としての成長の契機 :「授業スタイル」の形成と変容

その役を持って成長することは大事だという意識はあったと思います。」（第 2 次インタビュー）

そして，この言葉に続いて，B 氏は「中学校の時の良い先生方との出会いが，僕を造ってもらったんだなぁという思いはあります。」と述べている。つまり，C 市立 O 中学校に保健体育専科教諭として採用され運動部活動を指導した時には，運動部活動よりも，学級活動や生徒会で生徒が中学校生活全体を楽しむことを尊重する教師像を明確に持っていたと解釈できる。

4-2　中学校の保健体育教師としての採用と初任校での成長【1989.4-1997.3】

B 氏が新採用の保健体育教師として赴任した C 市立 O 中学校は，小規模校で各学年が 1 クラスのみ，教科の教員はそれぞれ 1 名で非常勤の教科が 3 教科という構成であった。学級数が少ないので保健体育授業の担当コマ数は少なく，授業準備や授業後の学習カードへの朱書きなどの個別指導に多くの時間を割くことができたという。一方で，教員数が少ないので多くの校務分掌に携わる必要があり，運動部活動の指導はもちろん，生徒会の指導を通して地域社会の活動に携わるとともに，労働組合の教育研究集会で集団作りや教科の勉強を深めたという。

B 氏は，赴任早々の 5 月に当時としては珍しい春の「体育祭」の開催準備に携わることになった。O 中学校は，小規模校でもあるので全教員が協力して「体育祭」の準備や運営にあたっていた。ただし，その運動会の内容は運動競技中心ではなく，生徒の人文字を保護者に見せて生徒と教員，保護者がともに楽しむ内容であったという。また B 氏は，以下のように教師が 3 年生や生徒会と協力して準備や運営を行っていたと述べている。

「はい。で，ぼくの前の方が OS，かな？(中略)その方が，入場行進とかそんなんもしない，体育祭で。小学校の屋上から保護者が見て，

全校生徒で人文字をしたり，組体操をしたり，をオープニングセレモニーと称して，子どもたちがこう人文字を見て，でなんかお祭りでの，フェスティバルのような雰囲気の開会式をすると，いうような体育祭の手法。子どもたちに，しっかり三年生がリードしながら，こう，やるような体育祭をされてて。いきなりね，そんなん「やれ」って言っても…でも体育の教員だけが体育祭を引っ張るようなんじゃなくて，教職員みんなで，まぁ生徒会も…＜各教科一人ずつだもんねぇ。まぁ十人くらいか。＞そうです。で三年生がリーダーしとかんといけんけん三年生の担任の先生と，生徒会の先生と体育とがこう話し合いながら。実行委員会形式で子どもたちも。(後略)」（第１次インタビュー）

学校に１名しか保健体育教員がいない状況で，B 氏は，以下のように述べ，前任者が残した教材のファイルをもとに，その授業を受けてきた子ども達に聞きながら保健体育の授業を進めたという。

「たぶんその当時この本はまだ見てなかったけど，とにかく OS 先生が残してくださっとった子どものファイル…やっぱりポートフォリオ作ってたんですよ。で学習ノートとかあったんですよ。それでそのようなのを 2 年生とか 3 年生とかに見せてもらいながら『あーこういう風な感じなのか』っていうようなのを見て，自分なりに真似して，学習ノートをバスケットなんかも作ったと思います。で，OS 先生は，心電図（引用者注：学校体育研究同志会の開発したボール運動のゲーム記録の手法）もやっぱり子どもにとらせてましたね。」（第１次インタビュー）

B 氏は，課題となる運動を自分で示範して生徒に見せ，それを模倣して練習を指示するという伝統的な体育授業ではなく，子ども達に運動技能の習得過程を観察し記録させる「授業スタイル」をこの初任の段階から実施していた。また，民間教育研究団体の学校体育研究同志会から学んだ前任者の成果を摂取し，教える運動技能や運動に関する知識という内容を明確にし，その内容を教えるために開発された運動教材を体育授業で教えたことを，以下のように述べた。

「例えば，短距離の，うまくやっちゃ失敗して，ってやってましたけど，こうやって，田植えのようなやつを。田植え走（引用者注：出原泰明氏の開発した陸上運動の教材）をやったり。リレーなんかはゴーマークとかああいうのはよくやりましたね。それから，バスケットの，その OS 先生の学習ノートを真似しながら…」（第１次インタビュー）

B 氏は，教師集団が生徒と保護者と協力して学校を運営する風土の中，8 年間の O 中学校時代に，授業を工夫する時間的余裕があることを活かし，労働組合の教研集会での研修，前任者の残した資料や体育の著作から学習した成果を授業で実践することにより，次のような「授業スタイル」を形成したと考えられる。つまり，教える内容を明確にして開発された運動教材を用いて，子ども達に運動技能の習得過程を観察し記録させて練習の課題を理解させた後，子ども達に運動の課題を自覚した練習をさせて運動技能の上達を図るという「授業スタイル」である。B 氏は，その頃の授業の工夫について，「こんな工夫をしていく事で子どもが学んでいくっていう実践の面白さ」と次のように振り返った。

「成果がでますよね。なるほど上手くなるじゃんて。で，なんかそういうこうただ単にリレーとかさせるんじゃなくて，こんな工夫をしていく事で子どもが学んでいくっていう実践の面白さみたいなのを少しずつ。工夫したり，指導の仕方を工夫したりする事の面白さが。まぁ，時間が少ないからその準備もできるし，ホントですよ。それはそうですね。」（第２次インタビュー）

4-3 大規模校の進路指導主事として困難な生徒指導に追われる【1997.4-2003.3】

採用後 9 年目の 1997 年 4 月に B 氏は，保健体育教員が常勤 3 人，臨時採用 1 名，非常勤講師 1 名の 5 名いる大規模校の C 市立 P 中学校に転任し，6 年間在籍した。B 氏は，自治的な校風の学校から管理的な校風の学校へ転任したときのつらさを以下のように述べた。

「あれはちょっとこう辛かったですね。最初から多いところも初めてだし，こんなモノ

なのかなぁと。まぁ，自治を育てようとする学校から，1，2 位を争う管理の学校に行ったんで。だから，毎月服装点検。前髪，スカート，持ち物検査，修学旅行も持ち物検査。パンツに名前が書いてあるかまで。」

生徒指導で困難を抱える P 中学校では，問題が起こるために「体育祭」を開催できなかった。また，毎日 18 時 30 分まで生徒を運動部で活動させ，週末も運動部活動に参加させて管理し，問題が起きないようにしていたという。B 氏は，管理的な生徒指導に追われる以上に，授業の進め方について，保健体育教員で合意して管理的な内容や指導法をとらざるを得なかった挫折の経験を次のように述べた。

「授業で。必ずラジオ体操をやって。まぁある意味それも大事なんですけど，必ずそれをやって，腕立て腹筋背筋馬跳びとかっていうのがルーティンとしてあって。まぁそれも大事だとは思うんだけど，＜おもろないでしょ？＞おもろない…自分もおもしろないし，子どももなんか…まぁでもそれずっと続けることは大事なんかなぁと思うんですけど。まぁどうもそういうところも，初めて自分一人でやってなくて，体育の教員が三人くらいいて，で，そこをくずせない。だから「もっとこうしていきませんか」っていうのもなかなか…」（第 1 次インタビュー）

転任 2 年目と 3 年目に 1 年生から 2 年生に持ち上がった時には，学年全体の担任教師が協働で集団づくりに取り組み学年全体の生徒が落ち着く成果を得た。その後，転任 4 年目から進路指導主事になり，連続 3 年間副担任として 3 年生の保健体育授業を担当した。また，6 年目には次年度から再開する体育祭の素案を作り次年度開催の目途を立てるなど，体育祭等の行事を大切にする教師像は保持していたという。

4-4 メンターの支援による体育授業の考え方の確立【2003.4-2017.3】

2003 年 4 月に，B 教師は C 大学附属 Q 中学校へ転任した。附属 Q 中学校は各学年 2 クラスで，保健体育教員は選任が 1 名，非常勤講師が 1 名の小規模校であった。附属 Q 中学校は毎年 1 回公開研究会を開催し，学校の研究主題に基づいて各教科の研究授業を公開していた。当然，B 氏も赴任した年から秋の公開研究会で授業を公開し，協議会で実践報告を発表することになった。B 氏は，中学校教育を実践的に研究しその成果を発信する附属 Q 中学校の使命を果たすために，体育授業理論と附属 Q 中学校の研究主題を理解する課題を突きつけられたのである。

B 氏は，前任の保健体育教師で副校長をしていた E 氏の副校長室にしばしば出入りし，体育授業の参考文献や考え方について教えを請うたと述べた。また，学習指導案はもちろん，公開研究会や学校紀要に発表する文章の添削指導を受けたと述べた。E 氏は，B 氏が体育授業理論を理解するためのメンターであり，体育授業の理論を理解し実践的な専門性を獲得することを支援する役割を果たしていた。

4-4-1　体育授業の考え方の確立【2003.4-2005.3】

B 氏は，C 大学教員の保健体育担当の X 氏や心理学担当の Y 氏に専門的知識の支援を受け，C 大学附属 Q 中学校の研究主題である「表現・コミュニケーション力」を保健体育の授業でどのように捉えて育成するのかについて，実践的に研究をすすめ，毎年公開研究会で授業を公開するとともにその成果を附属 Q 中学校の学校紀要に公表していった。

赴任 2 年目に附属 Q 中学校の学校紀要に B 氏は以下のように書いている。「マット運動の授業実践において，「わかる」「できる」を中心的課題とし，「内的表象を高めさせること」「相手を意識させること」を力点において，「表現・コミュニケーション力」の育成をめざした。結果として，生徒同士が互いにかかわりあいながら，練習を積み重ねて，生徒一人ひとりが技術認識や技能のレベルアップを図ることができ，そのことを通して，生徒の表現・コミュニケーション力を高めさせるなど，一定の成果を上げることができたのではないかと考える。」

この時期に，B 氏は，自分が初任の O 中学校で形成していた「授業スタイル」を支える体育授業理論を自覚したと次のように述べた。

「E 先生が言われる事は凄くよくわかって，たぶん，困って新採の頃から読んでいたモノなんかの影響でそんなに違和感なく，E 先生言われるような事は解る。でも，研究部なん

かがいろいろ難しいような事を言うけん，まだ理解は充分でないんだけどそうやりながら，体育の授業というのをしっかりやっていたことをちょっとずつ理論づけていったというかそういう段階が最初の段階」（第２次インタビュー）

4-4-2 「授業スタイル」の変容【2005.4-2017.3】

C 大学附属 Q 中学校副校長の E 氏と C 大学附属Q小学校で体育授業を研究していたF氏は，各学校別に開催していた公開研究会を連携させることを意図し，B 氏と F 氏が同じ教材を公開授業で指導するよう依頼し，公開研究会で共同の分科会を開催した。そこで B 氏は，附属 Q 小学校の F 氏の体育授業を参観し，衝撃を受けたと以下のように述べた。

「ただ，僕は上手くする方法を子ども達にダーッと教えて，で，結構リレーなんかのバトンも上手く，勿論そのゴーマークだったりだとか，あんな事もしながらですね，方法的には勉強して子どもを上手くしてそれなりに子ども達には達成感を味合わせていたと思うんですけど，それは全部こっち側が教えて，子どもが考えて，どう考えているかっていうのは不問にしていると。（中略）ところが F 先生の授業は，揺さぶるというか，子どもに問いかけて，で，子どもが感じとる事を引き出したり，何を子どもがこの時間で学び取っていったんかとか。子どもからこう答えを引き出すというか，そんな問いかけ，揺さぶりがあって，決してこっち側が一方的に教えてない。あの時 6 年生，僕は中 3 のリレーをしたんですけど，小学 6 年生の方がよっぽど学んでるなと目の当たりにしたですよ。」（第 2 次インタビュー）

「はい。あの授業をみたのが 1 番，体育の授業の凄い授業は僕はたぶんそれが初めて，1 番最初に観た。それまではとにかくいかに効率よく子どもに解りやすく上手にさせるかって事ばっかりにこだわってたような気がするんですね。」（第 2 次インタビュー）

その後，2005 年度に F 氏が C 大学附属 Q 小学校から附属 Q 中学校の副校長に転任し，C 大学附属 Q 小学校と附属 Q 中学校が共同で公開研究会を開催することになった。B 氏は，F 氏から日常的に体育の授業研究の課題意識や分析の方法を学ぶことになり，子ども自身が学習することを支援する「授業スタイル」を模索することになった。そして，附属 Q 中学校の研究主題の「活きて働く学力」を育成する体育授業を研究し，知識や技能という「学んだ力」に加え，学習意欲や仲間と学び合う力の「学ぶ力」を育成するために，子ども自身が学習する「授業スタイル」を探求していった。B 氏は，F 氏の「授業スタイル」から，「競争」を教える教育内容観と，教師の目標を子どもの目標に転化させる指導観を学んだと次のように述べた。

「もう少し前から F 先生のあの，揺さぶられとって，F 先生は小学校にいる，E 先生が 3 年間いらっしゃる 3 年目くらいかな，ここで 3 年目で自分の授業をもっと高める目標というか，イメージがそこでできて，で，F 先生から学ぼうというのが凄く出てきている。それで副校長になって，あの，エーさらにあの，競争のことやそれから体育の授業で課題とされているところの一つは競争という部分とか，もう一つはやはり目標をどう子ども達に持たせるか一つの方法としてこういった事も，あの大事な要素なんじゃないかという事に影響を受けつつ，はい，やっていった実践だと思います。」（第 2 次インタビュー）

B 氏は，2006 年の附属 Q 中学校の学校紀要に，陸上運動の短距離走を教材として，「競争」を教える内容に設定し，生徒の「競争に関する見方・考え方」がどのように変容するかを分析した実践報告を発表した。また，B 氏は，教師の目標を子どもの目標に転化させるために，教師が目標とした運動技能の評価基準を生徒と対話してすりあわせる場面を授業に設定し，その評価基準で生徒同士に運動技能を採点させる授業を 2010 年に中 2 のマット運動(連続技)，2012 年に中 1 のハードル走で実践し附属 Q 中学校の学校紀要に報告した。

B 氏の「授業スタイル」は，F 氏の影響を受け，第 1 に「競争」を教える内容に設定する教育内容観，第 2 に教師が目標とした運動技能の評価基準を生徒と対話してすりあわせることにより，教師の目標を子どもの目標に転化させる指導観について変容したといえよう。

5. まとめと考察

B 氏の「授業スタイル」は，中学校時代の恩師の影響により形成された教師像を基盤として，初任として採用された C 市立 O 中学校の 8 年間に形成された。それは，教える内容を明確にして開発された運動教材を用いて，子ども達に運動技能の習得過程を観察し記録させて練習の課題を理解させた後，子ども達に運動の課題を自覚した練習をさせて運動技能の上達を図るという「授業スタイル」であった。

採用 9 年目で転任した C 市立 P 中学校の 6 年間は，生徒指導の困難を抱えた大規模校で，管理的な保健体育授業を実践せざる得ない挫折を味わった。しかし，6 年目にそれまで開催されていなかった体育祭を翌年に開催する素案を提案したように，中学校時代の恩師の影響により形成された教師像は保持していたといえる。

採用 15 年目に転任した C 大学附属 Q 中学校では，転任直後から E 氏の支援でそれまでの自己の「授業スタイル」の根拠となる体育授業の理論を身に付けることになった。また，C 大学附属 Q 小学校の F 氏の体育授業を参観したことを契機として，B 氏の「授業スタイル」は，第 1 に「競争」を教える内容に設定する教育内容観，第 2 に教師が目標とした運動技能の評価基準を生徒と対話してすりあわせることにより，教師の目標を子どもの目標に転化させる指導観について変容した。

B 氏のライフヒストリーの事例は，中学校の恩師の影響による教師像が基盤となり，初任期に研修や前任者の残した資料や著作から学んだことを実践し，時間的な余裕のある職場で子どもの学習成果を振りかえることを契機として「授業スタイル」が形成されることを示している。また，中堅期に E 氏や F 氏というメンターとの出会いにより，自己のそれまでの「授業スタイル」の背景にある体育授業理論を自覚するとともに，新たな教育内容観や指導観を含む「授業スタイル」へ変容したことを示している。

本事例を読んだ読者が，本事例を読者の職場や地域の実態に応じて解釈し，読者自身の経験を振り返る契機を得て，各自の成長課題を自覚し，それぞれの「授業スタイル」の形成や変容へ向かうことを期待したい。

本研究は，木原ら（2016,2017）の続報である。木原ら（2016,2017）は小学校体育専科教員 A 氏を対象に，本研究は中学校保健体育専科教員 B 氏を対象に行ったライフヒストリー研究である。両者の結果を比較し，小学校と中学校の学校種の相違が教師の成長の契機や「授業スタイル」の形成と変容に与えた影響について考察することができなかった。今後の課題としたい。

付記：本研究は，JSPS 科研費 JP15K12632 の助成を受けたものです。

引用文献

川喜田二郎(1967)『発想法』中公新書。

木原成一郎・林俊雄・大後戸一樹（2016)「授業の力量形成に関するライフヒストリー研究-A 氏の体育授業を中心に-」『学校教育実践学研究』第 22 巻，pp.217-227

木原成一郎・林俊雄・大後戸一樹（2017)「授業の力量形成に関するライフヒストリー研究（その 2）— A 氏の体育の「授業スタイル」を中心に—」『学校教育実践学研究』第 23 巻，pp.81-91

藤原顕(2007)「現代教師論の論点」グループ・ディダクティカ編『学びのための教師論』勁草書房，pp.1-25。

藤原顕・遠藤瑛子・松崎正治(2006)『国語科教師の実践的知識へのライフヒストリー・アプローチ』渓水社.

メリアム（2004)『質的調査法入門』ミネルヴァ書房， p.309.

森脇健夫（2007)「教師の力量としての授業スタイルとその形成」グループ・ディダクティカ編『学びのための教師論』勁草書房,pp.167-192.

鈴木淳子（2002)『調査的面接の技法』ナカニシヤ出版.